朝鮮美術展覧会研究序論
―日本帝国占領下の朝鮮における、日本人画家および作品の検討―

日比野　民蓉（慶應義塾大学）

朝鮮美術展覧会（鮮展）は、日本統治下の朝鮮で 1922 年から 1944 年まで 23 回にわたって開催された、朝鮮総督府主催の展覧会である。日本内地の官設展覧会であった帝国美術院展覧会を模範につくられた鮮展では、朝鮮の画家とともに日本人画家が多数活躍していた。しかし現在までの近代日本美術史研究において、鮮展で活躍した日本人画家の問題は全く顧みられてきていない。だが、台湾や満州での事象と共に、朝鮮における植民地期美術の様相を明らかにすることは、近代日本美術史を包括的に物語るために必要不可欠な作業であると考える。

本発表ではこのような問題意識を根底に、まず鮮展の設立背景について検討する。鮮展は内地から移住してくる日本人たちに美術鑑賞という娯楽を提供し、美術家たちに作品発表の場を与えることをひとつの目的としながら、他方では日本式の美術を植民地である朝鮮に移植することで、文化面からの同化を促すという多分に政治的な狙いをもっていた。そのような鮮展というシステムのなかで、東洋画部と西洋画部における在朝鮮日本人画家たちがどのような活動をおこない、また作品を制作していたかを、鮮展の図録と当時の新聞記事をおもな資料としつつ明らかにしたい。

そのうえで、台湾や満州国で開かれた官設展覧会と同じく、鮮展でも作品の重要な要素のひとつとして常に求められ続けた「ローカルカラー」の問題について考察する。この場合の「ローカルカラー」とは、主に朝鮮に特有の題材を扱った作品のことを示すが、朝鮮を表象した作品は当時内地でも多数描かれていた。本発表では内地と朝鮮で描かれた一連の朝鮮表象作品を、制作の主体者によって、内地画家の描いた作品、朝鮮の画家の描いた作品、そして鮮展日本人画家の描いた作品に分類して個別に検討を加える。さらに鮮展日本人画家の「ローカルカラー」作品には、彼らの錯綜した複雑なアイデンティティーが見え隠れすることを指摘したい。そして、朝鮮における彼らの「ローカルカラー」が、ひとつの様式、あるいは方向性として結実できなかった原因には、鮮展における在朝鮮日本人画家の立場の弱さがあったことを、台湾における同種の事象と比較して論じたい。

最後に、鮮展日本人作家たちの戦争画と彩管報国活動について振り返るとともに、1930 年代後半以降の鮮展における戦争画が、内地の時局動向を反映して「内鮮一体」のスローガンのもとに制作された状況について分析を加える。そして以上の考察から、日本帝国統治下の朝鮮における日本人画家の活動と作品の様相を総合的に振り返るとともに、植民地下における美術が自律的に存在できなかった、植民地官展の限界を明らかにする。